

日本語の助詞ハとガの多重機能性

伊藤 武彦

1. 外国人にとってハとガの獲得は難しい

日本語以外の言語を母語とする者が日本語を第二言語として学習する時、最も習得が困難な文法項目の一つに、ハとガの用法の区別の問題がある。例えば、雑誌『言語』1984年8月号の「日本語学習者の声」に寄稿した留学生の記事を分析すると、10記事のうち4人がハとガの習得の難しさを指摘している。かれらが書いた記事の該当部分を以下に紹介しよう。

ニール・ダル (インド)

・・・日本語の文法についていうと、非常に、簡単に見える「は」と「が」という助詞を使う時、今でもすごく間違ったりする。

シーラパッタクン・ワンチャイ (タイ)

・・・私にとって一番難しいのは日本語の助詞の使い方だと思う。それがよく分かるように勉強したり先生に聞いたりしていたが、助詞の問題点はまだまだたくさんある。例えば「は」と「が」の問題はある場合に日本人でも「それがなんとなく正しい」と言ってくれたが、

理由がはっきり説明できなかった。「以前私は助詞が大嫌いだったが、助詞の利点に気づいてからそんなに嫌いではなくなった。利点とは助詞が文の中の言葉の関係を示す事だと私は思う。それでもっと努力して助詞の勉強をするつもりでいる。

ウォラウト・チラソンバット (タイ)

・・・(動詞と形容詞の活用形も難しいですが) もっと複雑なことは助詞の問題です。日本語の助詞はたくさんありますが、私は「は」と「が」の使い方で困ったことを述べたいです。「は」と「が」のことは博士論文の研究題目のような難しいことですが、日本語のテキストには初めから「は」と「が」の問題が出てきます。「私はタイ人です。」という文章は私が初めて習った日本語の文章で、しばらくたって「本があります。」と「本はありません。」という文章を習いました。これは非常に難しいです。なぜかという、これはただ文法の規則だけでなく「は」と「が」の使い方は日本人の考え方と気持ちも含まれると思います。「は」と「が」の使い方は日本人は分かっていますが「どうしてこの場合は『は』を使うのか。どうしてこの場合は『が』

を使うのか。」と普通の日本人に聞いても、なかなか説明できないに違いありません。ですから、外国人にとって「は」と「が」の使い方は頭の痛い問題です。

伊勢島明美（ブラジル日系人）

・・・「は」と「が」は一番使われる助詞でありながら、よく生徒の頭を混乱させます。この二つの助詞はある程度までは、はっきりりと区別することができるけれども、文の意味を強める場合、どちらも強調する役目も果たすので、具体的に「は」と「が」の違いを説明するのは難しいと思います。

これらの日本語学習者の手記から読み取れるのは、ハとガの区別は学習の初級から（“今でもすぐ間違ったりする”ように）上級まで学習者を悩ます難しい問題であること、ハとガは日常の日本語に頻出する基礎的な助詞であること、普通日本人はハとガを正しく直観的に区別することができるのがその理由を分析的に説明することは大変困難であること、ハとガの問題は日本語の専門家にとっても解明されていないことの多い（“博士論文の研究題目になるような”）厄介な問題であること、ハとガの使い分けには文法的な規則によるだけでなく心理的な要因（“日本人の考え方や気持ち”¹¹⁾）がからんでいるらしいこと、等であろう。日本語教育の長年の経験をふまえて、鈴木（1978）は日本語学習者による助詞の誤用のパターンをまとめているが、その中でハとガの誤りの占める割合は極めて大きい。助詞ハは、ほとんどの日本語の教科書でも第一課より出てくるし、ガも初級の初期の段階で出現する。ハとガの問題だけを取り扱った自習書である野田（1985）のような本も出ているほどである。野田はハとガの用

法を五十の文例によって解説している。両助詞の区別は文法的にみてかなり複雑なのである。

さて、日本人の大人は、ハとガの分析的な説明はできなくても、いわば直観的にハとガを困難なく区別して使用しているようである。複雑なハとガの用法が、日本語を母語（第一言語）とする人においては、どのような過程をたどっていつ頃完全に獲得されるのであろうか。この問題についての知見を次節で述べたい。なお、次節で用いる文法的諸概念は第3節で説明する。

2. 日本語で育つ子どもは、早くからハとガを使い始めるが、正しく使用できるまでには長い時期を要する

日本語幼児は、いつごろから、どのように、ハとガの2つの助詞を使い始めるのであろうか。ハとガの出現の時期は、大久保（1967）の観察によれば、ハの初出は1歳6ヶ月以前であり、ガの初出の1歳9ヶ月より先行する。しかし、宮原と宮原（1973, 1976）の観察では、生後16ヶ月で2語発話が出現し、18ヶ月時に終助詞ネ、ヨ等が出現した後、生後20ヶ月目にほとんど同時期にガとハが2語発話の中にあられたとしている¹²⁾。また、前田（1977）の観察によれば、1歳8ヶ月時に「オトウチャンハガッコー」、1歳9ヶ月時に、「ベンキョー、ココ、オトウチャンハ」といったハを含む平叙文の発話が出現している。初期の発話におけるハとガの機能の科学的把握については、今後の研究をまたねばならないが、ハとガの両者とも、1歳後半にすでに出現していることで、以上の3つの研究に共通点がみられる。この時期の子どもの言語発達は個人差が大きいので、すべての子どもが2歳前にハとガを使い始めるというわけではないだろうが、言語発達の初期からハとガが出現

していることは間違いない。日本語教育にハとガが初級から出てくることと同じく、第一言語としてもハとガは使い初めの時期が極めて早い。それはハとガが日本語の基本構造にかかわる重要な文法項目であるからであろう。

横山・Schaefer (1986) は横山の子どもの発話記録に基づいて1歳半ばから3歳までの助詞の誤用について調べた。ハとガについてみると、本来ガを使用すべきところにハを誤って使用した数よりも、ハに対してガを誤って置換して用いた回数のほうが4倍も多いことがわかった。この傾向は、Harrington (personal communication による) が日本語初級学習者の助詞の誤用において見いだしたものと共通しており興味深い。彼によれば、低レベルの日本語初級学習者(アメリカ人)は本来ハを用いたり名詞句を省略すべきところにガを過剰に用いる傾向がある。

幼児期におけるハとガの使用と脱落について、Miyazaki (1979) は野地 (1976) の資料を分析した。ガは2歳4ヶ月以前は60%以上脱落していたが、2歳10ヶ月以降は10%台以下の脱落率となり大人(10.2%)の割合に近づくことにより、この時期を獲得の時期としている。一方、主題のハは、大人の脱落(省略)率が25.5%であるのに対して、子どもは2歳1ヶ月から5歳12ヶ月まで脱落率がいずれの年齢でも52.0~100%の範囲であり、新情報に対しガを使用するという関係が成立している子どもであっても、旧情報にハを使用する関係ははっきりと成立していない。しかし、対照の用法のハは、3歳7ヶ月以降脱落率が低い(15.6%)ことより、その頃に獲得のきざしがみえていているとしている(ちなみに大人の脱落率は0%であった)。この研究の問題点を挙げるならば、それは脱落率を指標をとっていることの問題である。特に幼児においては、助詞ハ、ガ等が省略さ

れた形も、おとなによって受容される。また、助詞の欠如、省略の規則が未獲得のため脱落したものとみなすのか、意図的に省略したものとみなすのかの区別がむずかしい、という問題もある。秦野(1976, 1979)は自由再生課題と模倣完成課題によって3~7歳児のガとハの発話を調べた。ガの使用は4歳児でも行われているのに対し、「一ハ一ガ」構文では7歳児では正答が急増した等、新情報に対するガの使用の開始時期(4歳~)が、旧情報に対するハの使用開始時期(6歳以上)よりも先行することが示された。これら2つの研究から、新・旧情報の区別という点でハの獲得はガよりも難しいことが示唆される。

学童期以降におけるハとガの区別について、林部(1979, 1983)は、小学校1年生~中学校2年生に対し、実験的方法でハとガによる新・旧情報の区別を調べた。小学校高学年になると、新・旧情報の違いが反応の違いをもたらし、中学生になって初めてハとガを手がかりとする新・旧情報の弁別が可能であった。伊藤・田原(1986)、田原(1985)、田原・伊藤(1984, 1985)は、ハとガの3つの機能——統語的機能・対象比較的機能・談話的機能——の獲得過程について4歳児から成人の日本語母語話者に対して実験的研究を行い、ハとガの諸機能が完成をするのは12歳頃であると推定している。これは英語の冠詞(Maratsos, 1976; Warden, 1976)やフランス語の冠詞(Karmiloff-Smith, 1979)の機能、とりわけ定・不定が9歳頃に獲得されるとする研究と対比してみると、より遅い時期である。

1歳後半頃から出現するが中学生以降になってようやく一定の完成を見るというように獲得するまでの期間が極めて長いハとガの発達過程は、他の領域の言語発達にはあまり例をみないものである。第二言語としての日本語学習のみならず、日

本語を第一言語とするものにとってもハとガの問題は長い時間がかかる大変な問題であると言える。

成人であってもハとガの使い分けを内観によって正しく言明することは、多くの場合極めて困難である。しかしこれは、日本人独得の思考や感情を外国人に伝えることの難しさということは全く無関係であると筆者は考える。説明できない理由は、日本人が学校教育のなかで適切な日本語文法教育を受けていないからであり、さらに言えば、ハとガの差異を的確に説明する文法理論が未確立であるからだと思われるのである。

3. ハとガは多重の機能をもつ

前節では、ハとガの獲得過程の先行諸研究を紹介するにあたり、様々な概念を説明なしに用いた。ここでは、ハとガは多重の機能を持つという立場から、ハとガの機能を整理することを試みたい³⁾。ハとガの心理言語学的研究の枠組みとして、すでに、ハとガの多重機能性⁴⁾として(1)ハは主題をあらわしガは主格をあらわすという統語的機能、(2)ハは旧情報をあらわしガは新情報をあらわすという情報構造に基づく談話機能、(3)ハは対照の意味を持つことがあるのに対しガは排他(または総記)の意味を持つことがあるという対象比較機能、の3つが指摘されてきている(Ito & Tahara, 1985; 田原・伊藤, 1986) これら3つの機能でハとガの用法がすべて説明可能というわけではないかもしれない。しかし3つともハとガの用法として代表的なものであり、両助詞の獲得過程を明らかにする上で有効な枠組みであると考えられる。以下、各々の機能について諸概念を整理し説明を加え、最後にこれらの機能間の相互関係について考察する。

(1) 主語と主格：ハとガの統語機能

ハとガの機能上の差異は、これまでに国語学、日本語学の分野で論争が行われてきているが、未だ定説をみない。両方の助詞とも、その機能が多重であることが問題を複雑にしている。本節では、ハとガの機能を、文(sentence)と談話(discourse)という2つの分析単位に基づいてとらえようと試みる。ここでいう談話(または文章)とは、文より上位の言語単位であり、継起する文の連鎖からなる発話を指す。統語論は、文を分析対象とし、談話文法は談話を分析対象とする。

文は、基本的に、命題(proposition)と法態(modality)の2要素から成るとみなしうる(Fillmore, 1968)。命題とはモノの存在、性質、動作、関係などをあらわす部分であり、法態とは、その命題に対する話し手の判断や態度をあらわす部分である。この点から見ると、ガは命題部分にのみかかわるといえる。すなわち、それが付いた名詞句が述部に対して主格 subjective/nominative であるという表層上の格関係を標示する。そして主格は多くの場合、動作主や経験者等として、述部に対する主体的な意味関係をあらわす。もっとも、受動文や、可能動詞(読める、等)・感覚動詞(見える、等)・好悪などの感情を表す述部(好きだ、等)などの場合では被動作主(動作の客体)にガが付く。したがって、ガの意味的な格関係(深層格)は、述部の種類によって決まる。いずれにせよ、ガは格関係を標示する格助詞であり、ある命題の中でそれが付く名詞句と述語の関係をしめす他の格助詞、たとえば、ヲ、ニ、デ、ヘ等と同じグループに属する。

しかし、ハはガのように格関係を標示する機能を持たない。ハは、話し手の主体的な態度表現を荷うところの法態の部分にかかわって主題を標示

する。すなわち、ハを伴う名詞句は述語に対する格関係を明示するのではなく、文中では文末の法態部分（助動詞や終助詞）に呼応するのであり、ハは格助詞ではなく係助詞なのである。吉本（1982）は次のように述べている。『「名詞句＋が」は文表現の素材的側面に属し、『名詞句＋は』は素材に対する言語主体の働きかけを示す陳述的側面に関わり、『が』はそれが付く名詞句と述語との関係を示し、述語との結びつきは1回きりである。『は』を伴う名詞句は、主題として、文末の陳述に呼応する』。Fillmore 流に言うならば、“素材”とは命題のことであり、“陳述”とは法態のことであるのである。

- (1) ヤスが賄賂で稼ぐお金で羽振りがよかった。
 (2) ヤスは賄賂で稼ぐお金で羽振りがよかった。

(1)では、「羽振りがよかった」という陳述部分に対する主体はヤスでなくともよい（例えば、ヤスが賄賂で稼ぐお金でヤスの息子は羽振りがよかった）が、(2)ではヤスに限定される。しかし、(2)では「稼ぐ」主体がヤスでなくても文はおかしくない（ヤスは子分が賄賂で稼ぐお金で羽振りがよかった）が、(1)では「稼ぐ」主体はヤスでなくてはならない。

- (3) Rockie gave the bribe to Yasu.
 (4) ロッキーがヤスに賄賂をやった。

(3)という命題を表現するために格助詞は(4)の傍点部のように強制的にきまり、動詞「やる」の場合、がはロッキーという動作主にしか付きえないが、主題の助詞ハは、3つの名詞のどれにも付きうる。

- (5) ロッキーはヤスに賄賂をやった。

- (6) ヤスはロッキーが賄賂をやった。
 (7) 賄賂はロッキーがヤスにやった。

どの名詞がハによって主題化されるのかは、格関係によるのではなく、発話された場面や話し手の意識や聞き手の共有知識や、先行の談話等々の言語的、非言語的文脈や発話者の心理状態に規定されるのである。そこで、ハの機能は、1文中で吟味されるのではなく、むしろ談話において分析されることによってこそ明らかにされうるといえる。談話文法の観点からすれば、ハは結束標識 cohesion marker, すなわち文と文とを結び付ける構成素として、言語運用のなかでのその使用のされかたが問題となる (Clancy and Downing, 1986)。

ハの機能を表す主題 (topic または theme) という概念は、多義的であり、以下に紹介するように研究者によって規定の仕方が様々である。

Crystal (1980) topic : ある文の topic とは、それについて何かと言われるところの人、あるいは物のことである。「心理的主語」とも呼ばれることがある。

Dubois et al. (1973) topique : 談話の主題 (theme) で、事柄についてなにかを言う場合の、その事柄、対話者の質問あるいは状況によってテーマとして与えられるもの。theme : 断定文で、それについて何か (述語) が語られることになる直接構成要素 (名詞句)。

Halliday (1970) topic : topic は複合的概念であり、(1)theme と(2)given の2つの機能に分けられる。

theme : 「心理的主語」であり、英語では最初

の位置に置かれている要素であり、「ここに私が言っていることの見出しがある」ことを意味する。

given：回復不可能な情報として、つまり聞き手が自分自身でテキストや場面から引出せないと予想されるような情報として話し手が扱う構成要素。

Li & Thompson (1976) topic：話されていることの領域の特定化の役割を持ち注意の中心であり、談話のテーマを知らせるという役割を持つ。

Kitagawa (1982) topic：日本語の主題とは、助詞「ハ」の付いた名詞句である。

Kitagawa (1982) のような表層的な定義を除けば、他の主題の規定は、いずれも話者の心理や文脈や場面に関連のあるものである。すなわち、ハの談話機能が問題となる。これを情報構造という観点からみると、旧情報と新情報によるハとガの使い分けの問題が、主題標識ハの解明の一つの鍵となっている。

(2) 旧情報と新情報：ハとガの談話機能

これまでに、新旧情報に関して様々な規定が試みられてきている。ハを伴う名詞句は、通常旧情報であり、ガなど格助詞がついた名詞句は通常、新情報があらわされているといわれる。旧情報は省略され、文中に表現されないことも多い。ここで、これまでの新-旧情報の定義を概観してみよう。

Chafe (1970) の new information と old in-

formation：new information とは、話し手が聞き手に初めて紹介すると考えている情報で、old information とは、発話の時点で既に話し手も聞き手も分けあっていると考えている情報である。

Chafe (1976) の new information と given information：new information とは、話し手がそれを話すことによって聞き手の意識の中に話し手が導入していると仮定する情報であり、given information とは発話の時点で聞き手の意識に存在していると仮定する知識のことである（但し Chafe は new-old と new-given の区別をしているのではなく、new-old の定義を変えたと見るのが妥当である）。

久野 (1978) の新しいインフォメーションと古いインフォメーション：新しいインフォメーションとは、重要度が高い情報であり、古いインフォメーションとは、重要度の低い情報である。

久野 (1982) の新しいインフォメーションと古いインフォメーション：先行分脈から復元可能なインフォメーションを、旧、復元不可能なインフォメーションを新と呼ぶ（久野、1982では、情報の重要度は別の概念として定義されている。）

田原・伊藤 (1985) は、Chafe (1976) の定義を参考にして、旧情報を聞き手の意識に存在していると話し手に仮定されている情報、新情報を発話の時点で聞き手の意識に存在しないと話し手に仮定されている情報、と規定し、情報構造に基づいてハとガの使い分けが完全にできるようになるのは14歳以降であるとの結果を得た。その際、す

でに文脈の中に登場しているもの（既出または既知）と発話の中に初登場したもの（未出または未知）との区別は、旧情報と新情報の区別と一致しないことが指摘された。Chafe (1970) の新旧情報の定義は、ここでいう未出・既出の区別に近い規定であり、不適切である。というのは未出の事物に対してハを付ける例が数多く見られるからである。例えば、演説や小説の冒頭文に「本日は」とか「私は」とかいきなりハがでてくることがある。

この様なハの用法は未出のものを題目化するところから「旧情報化」のハであると仮に命名することにしよう。これに対して、既出の名詞に対して付くハを今仮に「旧情報提示」のハと名付けることにしよう。旧情報提示のハも、文の主題をあらわすが、その談話における機能は大きく異なる。旧情報提示のハは、その名詞句を聞き手の意識の上で再確認させる役割を持ち省略可能性が高いのに対し、旧情報化のハは未出のものに対するだけに省略可能性は低いと考えられる。ハには新情報を旧情報のように扱う旧情報化という働きがあることを見落としてはならないと思うのである。

もっとも実際の言語使用の頻度からみると、旧情報化のハよりも旧情報提示のハのほうが圧倒的に多いと思われる。田原・伊藤 (1985) は、既出と旧情報とは違った概念であることを示した上で、既出のものにハが付くことが多いという共起関係を指摘している。

一方、ガについてはどうか。ガは新情報を表すといわれている。しかし、先にも述べたように、ガは格助詞であり談話の中で他の関連であるものを標示するという機能を持たない。したがって、ガが新情報を表すというのは厳密に言えば言い過ぎあって、あえて言うならば、非主題 non-topic の場合の主格を表すというべきであろう。したが

って、ガの付く名詞句は Chafe (1976) のいう新情報の場合も有り、旧情報の場合もあるし、また、久野 (1982) の言う先行文脈からの復元不可能性を直接標示するわけでもない。

新旧情報というのは、談話の流れの中で主題が次々に変更していくことにもなって表層化される句の情報構造上の相対的な位置づけである。文が単位でなく、談話が単位であるので、一文中に二つ以上主題があることも可能であるし、主題のない文も可能である。このように、談話の文脈の中での文と文との相互関係を踏まえ、さらに聞き手の意識や知識を踏まえてのハとガの使用の区別が求められているということが、第一言語での獲得が遅く、第二言語としての習得が困難であることの原因であると考えられるのである。

(3) 対照と排他：ハとガの対象比較機能

ハとガの対象比較機能は強調的用法とも呼ばれている。次の文例を見ると、

- (8) 私は人間です。
- (9) ロンはアメリカ人だが、ヤスは日本人だ。
- (10) 車が走る。
- (11) 私が社長です。

(9)のハが対照のハであり、(11)のガが排他（または総記）のガである。対照のハは、ふたつ以上のものを比較・対照的に表すときに用いられ、「それに対して」というような意味を持つ。この場合、対照されるものは(9)のように明示されている場合と、

- (12) 私、大阪は行きませんでした。

のように、明示されない場合がある。排他のガは、ある集合の中で「—だけが」という意味を表す。(11)の文は、他の人は社長ではない、ということを暗示している。対照と排他は、よく似た性格を持つ機能であるが、区別すべきものである。例えば、A先生とB先生が生徒に囲まれて写っている写真のA先生を指して、

(13) この人は先生なのです。(隣の人は生徒ですが)

ということは可能だが、

(14) この人が先生なのです。

ということは、B先生の存在を無視したことになるので、適切ではない。排他のガは該当するモノをすべてリスト・アップするという働きを持つからである。排他のガが総記のガとも呼ばれるゆえんである。

上に述べたような用法に対して、非強調的用法である(8)のハや(10)のガを、それぞれ中立判断のハ・中立叙述のガと呼ぶことにしよう。実際の言語使用において、主題のハは中立判断か対照のどちらかであり、主格のガは中立叙述か排他のどちらかであるというように、論理的には⁹⁾分類可能であるとするのが、筆者の立場である。ハが中立判断か対照かということと、その名詞句が新情報か旧情報かあるいは旧情報提示か旧情報化かということとの間には直接的な関連はない。これは、ガが中立叙述か排他かということと、その名詞句が動作主であるか被動作主であるかということと関係がないのと似ている。なお、中立叙述のこのようなハとガの対象比較的功能は、田原(1985)によると、日本語児は5歳頃から理解し始めるが、

語順の要因に左右されずに判断できるのは中学生頃だとしている。

以上の3つの機能を整理すると次の図のようになる。

機能	ハ	ガ
統語機能	主題の係助詞 文末の述部に呼応	主格の格助詞 次の動詞句に呼応
格の標示機能	なし	表層の主格を標示 (深層の格は動作主、被動作主、等)
談話機能	既出物を旧情報提示 未出物を旧情報化	なし
対照比較機能	対照 (vs. 中立判断)	排他 (vs. 中立叙述)

4. まとめ

以上、ハとガの問題について、多重機能性という観点から説明をしてきた。本論文のテーマは、このような言語機能上の複雑さが獲得・習得を困難にすることを示すことであった。残された問題として、ハとガの省略の問題を最後に指摘しておきたい。話し言葉においては、両助詞ともしばしば省略され、助詞なしの名詞句が頻出する。さらに、主格・主題にあたる名詞句全体が省略されることは、書き言葉においても普通のことであり、なんら非文法的ではない。このような省略の多用は、ハとガの発達と学習を遅らせるもう一つの重要な原因であると考えられるのである。省略可能性は、上述したように、機能によって異なり、Miyazaki (1979) の結果のように言語発達への影響も示唆されている。

このような機能上の複雑さと省略可能性の問題を他の言語とも比較していくことが今後の課題であ

る。

註(1)このようなハとガの区別と同様の現象が、朝鮮語の主題助詞 *eun/neun* と主格助詞 *i/ga* にもみられる。唯一日本語だけの問題ではない。ましてや、日本人論的な問題ではない。

註(2)ガは、「主語 *ga*+自動詞」文と、「主語 *ga*+他動詞」文とで使われ、自動詞文では、主語にあたるのは有生名詞と無生名詞のいずれかであるが、他動詞文ではすべて有生行為者であったという。ガが2語発話の文型で使用されるのに対し、ハは、そのほとんどが、「カミハ?」「コレハ?」等「名詞句 *-wa?*」の型で発話される。宮原らは、このハの機能を主題標識 *topic marker* であるとし、主題となる対象の名詞句を疑問形で表現することからハの使用が始まると解釈した。Scollon (1977) のいうように、大人—子供の1語文のやりとりの中で2語文の発生をみるような見地を發展させ、主題 *topic*—評言 *comment* という完結した1文が大人—子供間で成立するという観点からすれば、上記の解釈が妥当かもしれない(ハの機能は、そもそも談話機能が主要であるから)。あるいは、この発話を「名詞句+*wa*」という2語発話とみると、ハを相手に答を促す疑問標識の語(あえていえば終助詞)であるとみなすことも可能であろう。

註(3)ハを諸機能の複合体とみなすのではなく“特立的強調”(尾上, 1979)や“取り立て”(吉本, 1982)等の用語を用いて諸機能から単一の概念を抽出しようという立場もある。

註(4)多重機能性という用語は、Karmiloff-Smith (1979) がフランス語の冠詞の複雑な諸機能を表すために用いた *plurifunctionality* の語に由来している。Ito & Tahara, 1985等では、*multifunctionality* の語を多重機能性を表すものとして使用している。

註(5)「論理的には」と断ったのは、実際の分析で対照あるいは排他であるかどうかを判断することが困難な場合があるからである。中立判断と対照、および中立叙述と排他の間境界は非連続的であると言いはない。なお、両者の境界がはっきりしないこともあって、対照の用法は主題の用法から派生したと考える立場もある(例えば、尾上, 1979; 吉野, 1982)。

なお、筆者自身もこれまで、ある文中のハは対照のハか主題のハのどちらかであると考え、中立判断ということと主題ということを区別してこなかった。本論文からこの考えを改めたい。

参考文献

Chafe, W. L. 1970 *Meaning and the structure of language*. University of Chicago Press.

Chafe, W. L. 1976 Givenness, contrastiveness, definiteness, subjects, topics, and point of views. In C. N. Li (Ed.) *Subject and topic* Academic Press. 25-56.

Clancy, P. M. and Downing, P. 1986 The use of *wa* as a cohesion marker in Japanese oral narratives. In Hinds, J., Iwasaki, S. and Maynard, S. (Eds.) *Perspectives on topicalization: The case of Japanese wa*. Amsterdam: Benjamins. (in preparation)

Crystal, D. 1980 *A first dictionary of linguistics and phonetics*. Andre Deutsch.

Dubois, J., Giacomo, M., Guespin, L., Marcellesi, J. B., and Mevel, J. P. 1973 *Dictionnaire de linguistique*. Libraire. (伊藤 晃・木下光一・福井芳男・丸山圭三郎 編訳 1980 ラルース言語学用語辞典。大修館書店)

Fillmore, C. 1968 The case for case. In Bach, E., and Harms, R. T. (Eds.) *Universals in linguistic theory*. Holt, Rinehart & Winston, Pp. 1-90.

言語, 1984, 13(8)。大修館書店。

Halliday, M. A. K. Language structure and language function. In Lyons, J. (Ed.) *New horizons in linguistics*. Penguin, 140-165.

秦野悦子 1979 助詞「は」「が」の獲得：自由再生課題を通して。日本教育心理学会第18回総会発表論文集, 162-163。

秦野悦子 1979 子どもにおける“は”“が”の獲得

の研究。教育心理学研究, 27, 160-168。

林部英雄 1979 文における既知と新情報の弁別に関する発達の研究。特殊教育研究施設報告(東京学芸大学), 22

林部英雄 1983 文における新一旧の弁別に関する発達の研究, 心理学研究, 54, 135-138。

Ito, T. and Tahara, S. 1985 A psycholinguistic approach to the acquisition of multifunctionality in Japanese particles *wa* and *ga*. *Descriptive and Applied Linguistics*, 18, 121-131.

伊藤武彦・田原俊司 1986 ハとガの動作主性の発達。パン F. C.・八代京子・秋山高二(編)ことばの多様性, 87-106。文化評論出版。

Karmiloff-Smith, A. 1979 *A functional approach to child language: a study of determiners and reference*. NY: Cambridge University Press.

Kitagawa, C. Topic construction in Japanese. *Lingua*, 57, 175-214.

久野 暉 1973 日本文法研究。大修館書店

Kuno, S. 1973 *The structure of Japanese language*. Cambridge MA: The MIT Press.

前田紀代子 1977 乳幼児の言語発達に関する調査研究(IV)。日本教育心理学会第19回総会発表論文集, 362-363。

Maratsos, M. P. 1976 *The use of definite and indefinite reference in young children: an experimental study of semantic acquisition*. Cambridge University Press.

宮原英種・宮原和子 1976 Language development in a young Japanese child: Mainly on the acquisition of particles. 福岡教育大学紀要(教職科編), 26, 91-97。

宮原和子・宮原英種 1973 幼児における文法発達の諸相。日本心理学会第37回大会発表論文集, 698-

699。

Miyazaki, M. 1979 The Acquisition of the particles *wa* and *ga* in Japanese: a comparative study of L1 acquisition and L2 acquisition. Master's thesis. University of Southern California.(Unpublished).

前田尚史 1985 日本語文法セルフマスターシリーズ 1: はとが。くろしお出版

尾上圭介 1979 助詞「は」研究史に於ける意味と文法。三十周年記念論集, 神戸大学文学部, 365-386。

大久保愛 1967 幼児言語の発達。東京堂

Soollon, R. 1977 A real early stage: an unzipped condensation on child language. In Ochs, E. and Schieffelin, B. B. (Eds.) *Developmental Pragmatics*. Academic Press, 215-227.

鈴木 忍 1978 文法 I 助詞の諸問題 1 国際交流基金 凡人社

田原俊司 1985 助詞ハ・ガの対象比較的機能の獲得 日本教育心理学会第27回総会発表論文集, 240-241。

田原俊司・伊藤武彦 1984 新一旧情報を表す助詞「は」「が」の獲得。日本教育心理学会26回総会発表論文集, 650-651。

田原俊司・伊藤武彦 1985 助詞ハとガの談話機能の発達 心理学研究, 56, 208-214。

田原俊司・伊藤武彦 1986 日本語のハとガの獲得に対する機能的アプローチ 東京大学教育学部紀要, 25, 227-236。

横山正幸・Schaefer, R 1986 幼児初期の助詞の誤用 日本心理学会第50回大会発表論文集

吉本 哲 1982 「は」「が」: それぞれ機能するレベルの違いに注目して。言語研究, 81, 1-17。

Warden, D. A. 1976 The influence of context on children's use of identifying expressions and references. *British Journal of Psychology*, 67, 101-112.

- 追記：(1)本論文の一部は、伊藤武彦・林部英雄・石黒広昭・町田重先 1985言語発達研究への機能主義的アプローチ。心理学評論, Vol. 28, No. 2, Pp280-305の伊藤の執筆部分を全面的に書き直したものである。筆者が刺激をうけたこの3人の共著者および田原俊司氏に感謝する。
- (2)本稿脱稿後、ガなどの格助詞の談話機能として、新情報提示と新情報化の2つがあり、これらの概念で、「未知」「復元不可能性」といわゆる「新情報」の概念が整理できるのではないかと考えている。しかし、この議論をすすめると、本論文の前提をくずすことになるので、ここでは言及するに留める。